

日本YMCA同盟

THE  
YMCA

The Young Men's Christian Association News

12

No.812 2021

2021年12月1日発行（毎月1日発行）  
1947年10月27日 第三種郵便物認可  
本体価格45円（外税）（送料63円）  
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟  
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号  
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641  
URL : <https://www.ymcajapan.org/>  
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜

YMCA



OPINION

## 自ら職業を選択するために 一人でも多くのロールモデルを

NPO法人フェアスタートサポート代表 永岡 鉄平

フェアスタートは、児童養護施設や里親家庭等で生活している中学生高校生たちへ「就職相談」「職業適性検査の実施」「会社見学や就労体験のコーディネート」などの就労支援を行っています。社会的課題でもある「若年層ワーキングプア」について、高校卒業後に就職し施設を出て自立した若者たちの数年後を見てみると、その半数の月収は15万円に満たないという調査結果があります。その要因として考えられることの1つは、「早期離職率の高さ」です。せっかく正社員として就職できても、1年以内の離職率は50%近くまで達しているというデータがあるのです。

この原因として、キャリア教育の不足やお金・保証人不在を背景とした就職の仕方があります。「近くに寮付き（の就職先）がそこしかなかった」「学校の先生にすすめられた」、将来やってみよう仕事、なりたい社会人のイメージが具体的に持てないと、このように周りに流されるように就職を決め、自分で決めた感の低い状態で働き始める若者も少なくありません。さらに、18歳という年齢で保証人なしに住居を借りることは今の日本ではとても難しいので、就職と同時に住居問題を解決する方法として寮付きの就職を選択しやすい文化も依然根強くあります。就職という大きな環境の変化とともに若者たちの多くは「失敗できない」という独特の緊張感、孤独感のなかで暮らしていきます。心が折れてしまう若者は少なくありません。職場に恵まれなかったり、上手く溶け込めなかったりすると、何か辛いことがあった際に耐えられず仕事を辞め、収入が途絶えます。結果、目先の収入を手っ取り早く得るために非正規雇用の世界へ移行します。住み込み就職を選択した若者の場合、同時に住居も失い、正規の再就職はより難しくなります。結果としてワーキングプアとなっていくのです。

こういった若者たちの背景を踏まえて、私たちは児童養護施設におけるキャリア教育に力を入れています。将来の就職活動の際に、職業をこれまでの経験や関心にもとづいて自分の意志で選択すること、「自分で決めた」という意識を持つことは、簡単に投げ出さないための第一歩になると考えています。18歳という周りが決めたリミットで急いで考えるのではなく、時間をかけたキャリア教育を通じて「自分がどう生きていくか」を考えることで、ワーキングプアは減らせるのではないかと考えています。

児童養護施設には、日常で関わる大人の数が少なく、職業観をイメージする機会に恵まれていない子どもも多くいます。ここには第三者によるエンパワメントが絶対的に必要です。子どもたちが施設という生活の場においてもさまざまな人との関わりや体験を通して、自己肯定感を育みながら、多くのロールモデルを得ることでキャリアの精度を上げていく。そして職業選択に広さと深さを生み出すことが、一人ひとりの豊かな人生を作っていくに違いありません。（横浜YMCA 会員）

Technology for social inclusion & diversity

Youth Empowerment

### 3 Technology for social inclusion & diversity

インクルーシブな社会の実現のために、あらゆる場面でテクノロジーを活用し、多様なオンラインコミュニティのプラットフォームとなる。

日本全国において都市YMCA、学生YMCAが、それぞれの地域性やこれまでの歩みの上に日々、活動を展開しています。それぞれ多様性・独自性を最大限に活かしながら、日本のYMCAが一致協働して目指す方向性を定めたものが日本YMCA中期計画です。5つの項目からなり、これらを通してブランドビジョンである「ポジティブネットの創造」を、一歩前に進めることができるよう願っています。順次ご紹介していきます。（日本YMCA中期計画2021-2023）



# プログラミングの楽しさを児童養護施設の子どもたちに スタート Amazon Cyber Robotics Challenge **始動**

YMCAでは、2019年より「誰もがテクノロジーで世界を変える」をテーマとするプログラミング教室を開講しています。この取り組みは、多様な環境に身を置く青少年に、ICT・プログラミングを学ぶ機会を広く提供することを目的に、アマゾンジャパンとの連携のもと、日本国内で展開している地域貢献プログラムです。全国で約900名の子どもたちが参加してきました。

特に、2020年以降のコロナ禍では、学校・塾を始めとしてオンライン化が急速に進み、子どもをめぐるICT環境、すなわち学校の整備状況、家庭の経済状況（パソコンやタブレット、インターネット環境の有無）や保護者の理解が、ますます「学びと将来格差」につながるようになりました。中でも、被虐待経験のある児童が多く暮らす児童養護施設では、一人ひとりいつでも自由に使えるコンピュータが限られていて、ICTスキルを身に付けて社会に出るための機会が一般家庭に比べ少なく、特に不利だと言われています。

このような状況においてYMCAでは、児童養護施設や里親家庭の若者の就業を支援するNPO法人フェアスタートサポートの協力を得て、児童養護施設で暮らす子どもたちを対象にプログラミングの教育プログラムを展開します。今後は関東甲信越地方の児童養護施設で暮らす子どもたち向けに対面あるいはオンラインで教室を展開し、2022年1月以降は全国の児童養護施設（約600箇所・児童数約27,000人）のうち約1万人まで対象を拡大していく予定です。

「Amazon Cyber Robotics Challenge」はロボットを使ったゲームを通じて子どもたちの創造性や問題解決能力を高め、STEM分野\*への興味をかきたてることを目的としたオンライン学習プログラムです。

最先端のシステムと設備で自動ライン化されたAmazonフルフィルメントセンターで、お客様に商品をお届けするまでの流れを基にしたアクティビティからコーディングの基礎を学びます。2022年1月より、YMCAの各拠点でもこのプログラムを体験できます。

\*科学、技術、工学、数学の4分野を統合的に学び、将来、科学技術の発展に寄与できる人材を育てることを目的とした教育プラン。

神奈川県にある児童養護施設聖園子供の家において、日本で初めて「Amazon Cyber Robotics Challenge」を用いたプログラミング体験を実施しました。コンピュータに触ったことがない子どもたちでも感覚的にプログラミングの基礎が学べるこのプログラム。子どもたちはYMCA高校生事業部の高校生たちとともに次々とチャレンジをクリア、難しかったけど楽しかった、続きをやりたいなどたくさん声が聞かれました。



## 施設のみなさまの感想

「一つひとつの達成感が解放感につながっていたのが印象的」

「こんなに子どもたちがテクノロジーに夢中になるとは予想していなかった。施設も考えを変えていかないと」

「年齢の近い高校生の存在は素晴らしいロールモデル」

「テクノロジーを対面で取り組むのもこれまでにないかたち」

## テクノロジーが子どもたちの可能性を広げる 札幌でドローンプログラミングに挑戦

北海道YMCAでは、2020年からAmazon Future EngineerのWebデザインコースを3回実施し、テクノロジーに触れながら『自分の思いやアイデアを形にする力』を育てています。今年度は、地域団体から寄附されたパソコン20台を活用し、より多くの子どもたちを対象にプログラミングクラスを実施することができました。夏に行ったテックキャンプでは、ビジュアル言語を中心としたプログラミングでドローンを思い通りに飛ばすプログラムを行いました。初めてのドローンは操縦が難しく、思い通りに飛ばすことができませんでしたが、何度も「もう1回!」とチャレンジしました。仲間やリーダーと相談しながら、「直進から旋回して曲がっていくより斜めに飛ばした方が早い」とか、「離陸から着陸までの内容をできるだけシンプルにした方が早い」などチャレンジするたびに新たな発見をし、互いの意見を聞き、良いアイデアを活かしながら協力して取り組むことができました。



新しい技術を使いトライアンドエラーを繰り返し、協力しながら課題解決していくことはこれからの社会を変えていくために必要な力です。子どもたちがテクノロジーに触れる機会を増やし、新しい視点でその可能性を広げていく。そのためには私たちも日々アップデートしていくことが必要なのです。

北海道YMCA 木田 貴浩

## 日本YMCA 中期計画を語ろう

## 包み支え合う

### 3. Technology for social inclusion & diversity

神戸YMCA 橋本 唯

私は最近日本語学校から保育園に異動になり、保育園のイメージがガラッと変わりました。保育者（保育園の先生たち）は子どもを守り育てるだけではなく、保護者にも寄り添いながら保育を行っています。保護者がお迎えに来たときの会話や表情、子どもの様子を見ながら、保育者は保護者へと声をかけます。時に保護者から日々の悩みや辛さ、しんどさなどを聞き、ともに子どもの成長を喜び合う仲間として関わっている様子を見ることができます。

YMCAは人が集う場です。多様な集団がつながりをつくる場です。Social inclusion（社会的包摂）とは社会福祉分野において「全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う」と説明されています。表面的に見えない孤独や孤立、排除や摩擦は社会の中にたくさんあります。私たちは相手の表情が暗いとき、嫌な気持ちにさせられたとき、その人たちの背景にあるものを考えられるでしょうか。相手の話を聞き、寄り添うことができているのでしょうか。

今はテクノロジーの発展によって、より孤独や孤立を感じる人もいれば、より多様な人とつながり孤独や孤立から脱却できる人もいます。コミュニケーションの在り方も多様化しています。この時代に生きている私たちは、テクノロジーを活用しつつ、人々がお互いを包み込み、支え合う社会の一步を一緒に歩みたいものです。

